

前回は日本酒ラベルの発祥から現在までについて書いた。今回と次回は海外清酒に目を向ける。舞台は日本の旧領土から、最近、クラフトサケがつけられるようになった世界各地へ。テーマはラベルだが、内容は「海外酒造史」になるかもしれない。

海外酒を、時期と地域によって5つに分類してみる。

1つ目は、戦前の日本領やその影響力の強かった地域。具体的には朝鮮、台湾、樺太、満州、中国である。

2つ目は、移民にかかわるハワイとブラジル。

3つ目は、戦後、大手蔵が進出したアメリカ西海岸。

4つ目が、戦後、日本とのかかわりもあって酒造場ができた東アジア各地。

最後が、最近のクラフト酒ブームで小型醸造場が次々に生まれている各国だ。

### ●▲■ 戦前の朝鮮、進出相次ぐ

旧日本領の話から始める。朝鮮半島から見ていきたい。

朝鮮での清酒醸造は釜山から広がった。1876(明治9)年の日韓修好条約で盛んになった日本人の渡韓。釜山は、日本から一番近い街だった。朝鮮酒造協会『朝鮮酒造史』(1935=昭和10)によると、最初に本格的な設備を整えたのは、1883(明治16)年の福田醸造場である。「福久泉」から伊藤博文の命名で変えたという「向陽」=写真1=のラベルが、写真に残る。

喜多常夫氏の現地調査によると、その地は江戸時代に対馬藩が所管した日本人居住地「倭館」があった場所ので、当時から清酒醸造がされていた可能性があったという。(1)

釜山のほか仁川、元川、木浦、群山、馬山などが順次開港する。日清、日露の戦争によっても日本人が増え、それにつれて醸造場が次々に設立されていった。

手持ちラベルを、「朝鮮酒造史」巻末の名簿と照合すると、断片的ながら来歴が分かるものがある。

「寒牡丹」=写真2=は、山口県麻里布村(現岩国市)の原田酒造場がルーツ。同社は1902(明治35)年に釜山に直売店を出し、次いで自社銘柄「寒牡丹」での現地生産に転じた。そこにいた一族のメンバーが馬山に移って別の蔵を買収し、1923(大正12)年にやはり同じ銘柄で生産を始めたのがこれだ。

「山陽」=写真3=の松浦醸造場は、仁川の蔵で2年修行した人が、鎮南浦で1903(明治36)年に創業している。

「雞林」=写真4=の西田酒造場(馬山)と、「了海」=写真5=の松岡酒造場(釜山)は、いずれも1906(明治39)年に開業する。

今に禍根を残す日韓併合がなされたのは1910(明治43)年だった。この年、京城(現ソウル)で創業した難波酒場は、「鶴の井」=写真6=とともに「リットル」=写真7=というカタカナ銘柄を持つ。ラベルは未成品だが、赤く書き入れられた朝鮮半島の地図が、当時の雰囲気伝える。

同年、「亀公」=写真8=の吉谷源吉(全州)が、1914(大正3)年には「大典正宗」=写真9=の石橋酒造場(馬山)が、1923(大正12)年には「濱鶴」=写真10=の浜田醸造場(馬山)が開業する。

### ●▲■ 買うのは日本人、デザインは内地風

いずれもラベルは日本風で、内地のものほとんど変わらない。修好条約以来、日本は朝鮮を属国視し、日韓併合でさらなる同化圧力をかけていった。日本の制度や文化を押し付けることに何のためらいもなかったのだろう。酒のラベルのデザインもそう。松があり、桜があり、鶴亀があり、富士が顔を出す。

もっとも、朝鮮の人が普通に飲むのは焼酎や薬酒、自家製のマッコリだった。清酒を買うのは、主に経済的に余裕があった日本人である。1936(昭和11)年時点で55万人という分厚い顧客層であり、日本人相手なら、あえて朝鮮の色を出す必要はなかっただろう。印刷も多くは日本でしている。

もっとも、朝鮮産の酒は内地からの移入酒より格下とみられたか



写真1 「向陽」(朝鮮・釜山、『朝鮮酒造史』より)



写真2 「寒牡丹」(朝鮮・馬山、樽貼り)



写真3 「山陽」(朝鮮・鎮南浦、樽貼り)



写真4 「雞林」(朝鮮・馬山、樽貼り)



写真5 「了海」(朝鮮・釜山)



写真6 「鶴の井」(朝鮮・京城、樽貼り)



写真7 「リトル」(朝鮮・京城、樽貼り)



写真8 「亀公」(朝鮮・全州、樽貼り)



写真9 「大典正宗」(朝鮮・馬山、樽貼り)

らこそ、日本のデザインを志向した、とうがっても考えられる。馬山で刷った「濱鶴」や、「和可松」「天祐」=写真 11、12 印刷地は不明=は、そんなことを思わせる。

醸界新聞社『日本酒類醤油大鑑』(1936 = 昭和 11) によると、朝鮮の酒造場は、1916 (大正 5) 年には 265 場にも達している。醸造石数は 3 万 4000 石。17 年後の 1933 (昭和 8) 年になると 129 場と半減しているが、逆に石数は 6 万 7000 石と倍増する。規模が大きくなったことを示し、「千石酒場」も珍しくなかった。

地域的には、南部から中部にかけて多く、「朝鮮の灘」といわれた馬山に 16 場、次いで京城に 15 場が集まる (ただこの年、マッコリは 155 万石、焼酎は 38 万石。清酒は移入を含めても 8 万石弱で、あくまでマイナーな酒だった)。(2)

朝鮮の酒造場は、域内で品評会を開くなど、内地に劣らない酒づくりに研鑽を重ねるが、日本の敗戦で 119 の酒造場すべてが、烏有に帰した。その後の朝鮮戦争で混乱は続き、ラベルも現地には残っていないと思われる。

破壊を免れた酒造場では、一部で韓国人による酒造りが再開されるが、それは次回に譲る。

### ●▲■ 「新天地」満州 酒造も活況

次いで、北隣の満州・関東州である。

もともとは一体で、遼東半島の先端部が関東州。ポーツマス条約 (1905 = 明治 38) によって、日本がロシアの租借権を引き継ぎ、大陸計略の足場とした。野望を抱き、あるいは商機を狙う人たちがうごめき、怪しい活気に満ちた地域となる。

1931 (昭和 6) 年、関東軍の謀略による満州事変が起り、翌年、「満州国」が建国される。人が激しく動き、経済は活況を見せた。酒造業の動きもそれにつられる。

前掲の『大鑑』によると、関東州には大連・旅順に 12 場が設立され、満州には、中心都市・奉天に「金鶴」=写真 13、「楽天」=写真 14 や、「満州千福」など 12 場、全土では 49 場を数えた。合わせると 5 万 5000 石である。

満州で酒造が盛んになったのは、税制に理由がある。

日本国内と違って、醸造税がかからない。日本からの輸入酒に対しては高い関税障壁で守られ、市販酒で 3 倍近い差がついた。域内生産へのあからさまな保護である。それが結果的に、内地メーカーの満州進出の呼び水となった。先の「金鶴」加納酒造は灘の「白鶴」が出資。「満州千福」は、海軍御用達で知られる広島県呉の三宅本店が親会社である。「菊正宗」なども進出した。

中国本土にも一定数の酒造場があった。堂島麦酒 (大阪市) の橋本良英社長に、父親から聞いた話を教えてもらったことがある。

父親は当時、「国の花」摂津酒造の社長。醸造機械メーカーやラベル印刷所を引き連れて青島に渡り、「豊国酒造」を立ち上げた。何十万の兵の需要があってもうかったが、敗戦で何もかも失って帰国した。ラベル 1 枚ぐらい持って帰れなかったのかと聞くと、「命からがらだった」との答えだったと言う。

ほかの蔵も同じだっただろうが、中国での酒造の全体像は詳らかではない。ここでは同じ青島や漢中にあった「国光」=写真 15 =を紹介するにとどめる。



写真 10 「濱鶴」(朝鮮・馬山、樽貼り)



写真 11 「和可松」(朝鮮・大邱)



写真 12 「天祐」(朝鮮・龍山、樽貼り)



写真 13 「金鶴」(満州・奉天)



写真 14 「楽天」(満州・奉天)



写真 15 「国光」(中国・青島)



写真 16 「蘭丸」(台湾・台中)



写真 17 「福祿」(台湾専売局)



写真 18 「瑞光」(台湾専売局)



写真 19 参考「高粱」(台湾・宜蘭)

●▲■ 北は樺太、南は台湾

次に台湾。日清戦争で日本領となったのは 1895 (明治 28) 年。それまでは現地産の「火酒」「高粱酒」などがあったが、日本人による清酒の醸造も始まった。ただ亜熱帯気候という悪条件。一般的な酒ではなく、糖蜜酒や内地産の酒粕などさまざまなものを混ぜて濾過した「模擬清酒」だった。味に問題があり、しかも小規模経営。1907 (明治 40) 年には 54 場を数えたものの、漸減していった。

酒税の増収を図って専売制が敷かれたのは 1922 (大正 11) 年である。専売局は内地からの移入酒を管理するだけでなく、当時残っていた 26 場には補償金を払って廃業させ、自醸に踏み切った。(3)

『大鑑』によると、1936 (昭和 11) 年ごろの製造高は約 1 万石、内地からは、ほぼ同量の酒が移出されていた。

「蘭丸」=写真 16 =は専売前に台中にあった民間酒造場のラベル。「福祿」「瑞光」=写真 17, 18 =は専売局のラベルだ。「福祿」のバックはロゴマークだが、なでしこに似た花は、台湾の知人に聞いても分からなかった。参考までに、専売前の「高粱」「高粱火酒」「旧老酒」「黄菊 (老酒)」=写真 19 - 22 =を紹介しておく。日本風を意識したデザインになっている。(写真 16 - 22 は『台湾酒専売史』より)

ちなみに、専売局の酒造場 (旧大正製酒) は歴史的な建物として保存され、「台中文化創意産業園區」というアートスペースとして活用されている。先のラベルや醸造風景の写真も掲示され、被統治という負の過去を消し去ろうとしない懐の深さを感じる。

最後に樺太を見る。

先のポーツマス条約で、南半分は日本領となった。酒造場は、

2 年後の 1907 (明治 40) 年に 28 場、1912 (大正元) 年には 45 場まで増えた。極寒の地だけに、働く人は酒で暖を取る。一人が飲む量も、内地のほぼ倍だった。(4)

ただ 1 月中旬には、気温が零下 40 度近く下がる。造りには、台湾とは違った苦労があった。経営者の述懐が残っている。

「酒は凍って、呑み口はどうしても抜くことができぬありさま。12 月下旬から 2 月初めまでは到底醸造はできない。(中旬から再開するが) 寒気が強いと醪の表面が凍ることもあり、やむを得ず庫の中で焚火をしては幾分あて温度を上げて…」

そうした努力の果てに迎えるのが、3 月ごろからのニシンの漁期。「幾万という屈強の漁夫が入って参り、主の消費力はなかなか雄大なものに」という景気のいい話も付け加わる。(5)

その話を知ってラベルを見ると、北の潮風を感じるようだ。樺太の地図をあしらった「樺の光」と「天長」=写真 23, 24 =は中心地の豊原に、「千羽鶴」=写真 25 =は、南部の大泊にあった。「占領正宗」=写真 26 =は真岡である。

●▲■ ハワイ移民が愛した「フラ・ラベル」

第 2 グループは、移民にかかわる酒造場である。まずハワイ。

移民は、日本とハワイ王国との間で交わされた協約 (1885 =明治 18) で本格的に始まった。行き先はパイナップル農園や製糖工場。アメリカによって王国が転覆、併合されてからも、あっせんや呼び寄せでの渡航が続き、15 万人を越えるまでになった。

つらい労働をいやす酒は、灘から輸入され、1896 (明治 29) 年には 850 キロリットル (4600 石) にも達する。一升瓶にすれば 46 万本。「花楽正宗」=写真 27 =は江井ヶ島酒造 (明石市) が、輸入商「ピーコック商会」に向けたラベルだ。



写真 20 参考「高粱火酒」(台湾・嘉義)



写真 21 参考「旧紅酒」(台湾・台北)



写真 22 参考「黄菊」(台湾・台北)



写真 23 「樺の光」(樺太・豊原、樽貼り)



写真 24 「天長」(樺太・豊原)



写真 25 「千羽鶴」(樺太・大泊、樽貼り)

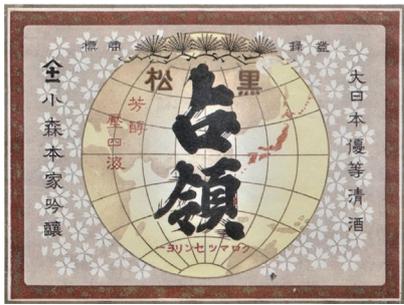


写真 26 「古領正宗」(樺太・真岡、全国樺太連盟) 写真 27 「花楽正宗」(ハワイ・ホノルル) 写真 28 「不二」(ハワイ・ホノルル) 写真 29 「金瓢正宗」(ハワイ・ホノルル)



写真 30 「宝正宗」(CA 州・パークレー)

写真 31 「宝娘」(CA 州・パークレー)

写真 32 「東麒麟」  
(ブラジル・カンピーナス)

写真 33 「東鳳」  
(ブラジル・カンピーナス)

ところが排日の機運で関税が6倍にもなる。それなら自分たちでつくろう、と広島出身の住田多次郎らが出資して、1908(明治41)年、ホノルル酒造(前身)を創立した。暖地の不利は、冷房設備を整えてクリアした。

「不二」=写真 28 =や「金瓢正宗」=写真 29 =など4社が続き、本土のコロラド州デンバーにも「ロッキー正宗」など2社が設立される。しかしその後の禁酒法(1918)と日本の真珠湾攻撃(1941)で、米国の酒造は壊滅した。

戦後は、製氷などで生き延びたホノルル酒造が醸造を再開し、ロサンゼルス「宝来正宗」など3社が復活、あるいは創業したが、世代交代で飲酒層が減った。最後まで踏ん張ったホノルル酒造も1992(平成4)年に廃業し、移民由来の酒造りは終止符を打つ。(6)

ただ創業以来の銘柄でラベルに宝船をあしらった「宝正宗」=写真 30 =とフラガールの「宝娘」=写真 31 =は、カリフォルニア州で醸造を始めた米国タカラに引き継がれ、ハワイのスーパーの棚に今も並んでいる。経緯は次回触れる。

●▲■ ブラジルで生き延びた「東麒麟」

ブラジルの移民は1908(明治41)年の「笠戸丸」に始まる。ハワイに代わる受け入れ先になったのがコーヒー農園だった。

過酷な労働はハワイと同じ。ただ日本の酒は地球の裏側までは届かず、現地の蒸留酒ピンガを痛飲して体を壊す人たちが相次いだ。それを憂えたのが、ブラジルに広い「東山(三菱財閥創始者、岩崎弥太郎の号)農場」を持つ岩崎家の現地支配人・山本喜嘗司



写真 34 「東麒麟一番搾り」  
(ブラジル・カンピーナス)

写真 35 「大地」  
(ブラジル・サンパウロ)

だった。

サンパウロに近いカンピーナスの農場の水と、イタリア移民の「カテテ米」による醸造を、1935(昭和10)年に始める。ポルトガル語のミリン(小さい)に通じる「キリン」と東山を合わせた酒銘が「東麒麟」=写真 32 =だ。別銘柄は「東鳳」=33。(7)

ただ原料米や設備の制約で、酒質は長く低迷した。劇的に改善したのは、1975(昭和50)年に同じ三菱グループのキリンビールが資本参加してから。「一番搾り」=写真 34 =に苦笑する。2022年に、ブラジルでの事業拡大を図りたいキッコマンが全株式を取得している。

ブラジルでは1930年代半ばにも、松山から渡った杜氏経験者の中矢虎吉が、小規模の酒造りを始めた。銘柄は「大和桜」。数年で畳んだが、その孫で「サクラ」醤油で成功した健一さんが酒に挑戦し「大地」=写真 35 =を販売する。醤油と並ぶ商品にとの思いを込めたが、残念ながら2010(平成22)年に醸造をやめた。(8)

(以下次号)

(Text: N. Ishida)

参考文献

- 文中にあげたもののほか、台湾関係は台湾総督府専売局『台湾酒専売史』(1941)を参考にした。注は以下の通り。
- (1) 喜多常夫『サケ・ウオッチング in 韓国の釜山 歴史編』=きた産業ホームページ 2016
- (2) 八久保厚志『戦前期朝鮮・台湾における邦人酒造業の展開』=神奈川大学人文学研究所報 36号 2003 データは『朝鮮酒造史』にも
- (3) 吉田元『台湾における清酒醸造1,2』=日本醸造協会誌102巻 11,12号 2007
- (4) 坂本順次郎『樺太の醸造業1』=日本醸造協会誌34巻8号 1939
- (5) ST生『樺太島に於ける酒造業概況』=日本醸造協会誌2巻8号 1907
- (6) 二瓶孝夫『ハワイにおける日本酒・味噌・しょう油の歴史 日本酒その2』=日本醸造協会誌73巻6号 1978
- (7)(8) 石田信夫『海のかなたに蔵元があった』時事通信社 1997

石田 信夫 (いしだ のぶお)

プロフィールは前号をご覧ください

QA? 本稿に関するご質問・ご意見等は、きた産業 ([info@kitasangyo.com](mailto:info@kitasangyo.com)) にご連絡ください。筆者に転送いたします。